大学生は予想外の適性検査結果にどのように反応するのか

How do Undergraduates React to Unexpected Results of a Vocational Aptitude Test?

浦　上　昌　則

Masanori Urakami

要　約

適性検査は自己理解の進展に活用される道具と位置づけられる。本研究では，適性検査の結果が対象者の認識に沿わない場合にどのような反応が生じるのかについて大学生を対象として検討した。また，キャリア教育の専門家を対象に，自己理解の進展に寄与すると考えられる，アセスメント結果に対する反応についての調査も行った。その結果，全体的な傾向として，学生はそのような結果に対して不適切な対応をしているとはいえないが，自己理解を進展させる反応をしているともいいがたいことが明らかになった。自己理解の進展につながりやすいのは，「自分に合わないと感じる職業」のリストを手にし，それに対して興味や好奇心を感じた場合と推察された。それ以外は，同化，あるいは結果の無視など，自己理解の進展にはつながらない対処によって，検査結果との均衡化をはかるようであった。

問題と目的

キャリア教育において，テスト，検査といったアセスメントの活用は重要である。キャリア教育に関するテキストを参照しても，アセスメントに関するテーマが必ず扱われている。それらのテキストでは，主にアセスメントを実施する者への留意点が述べられているが，アセスメントの受験者は結果をどのように認識し，利用しているのだろうか。より効果的なキャリア教育の展開を考える際，この疑問に示唆を与えてくれる先行研究が望まれるが，受験者によるアセスメント結果の利用について知り得る情報源は少ない。そこで本研究では，テストや検査といったアセスメントの結果の利用に関する基礎的知見を得ることを目的とする。

キャリア教育において，アセスメントは複数の位置づけ，目的を与えられる。たとえば室山（2008）はアセスメントについて，採用や人事考課場面での評価，カウンセリング等での診断，そして自己理解という 3 つのとらえ方の存在を指摘し，キャリア教育においては自己理解の道具として考えるべきと示唆している。このような指摘は他書でもよくみられる一般的な内容であるが，それはキャ

リア教育の起源とされるParsonsの指摘に由来するためといえよう（たとえばSeligman, 1994）。Parsons（1909）は，賢明な職業選択の要件として，自己理解，職業理解，およびこれらの関連性についての推論の3点を指摘した。この自己理解という要因の指摘が，後の職業適性検査など心理検査の開発を促進したといわれる（たとえば坂柳，2007）。このような経緯もあり，キャリア教育において自己理解の道具としてアセスメントが位置づけられることは一般的である。では，はたしてそれは受験者の自己理解に寄与しているのだろうか。

このような問いの重要性は，たとえば吉中（2011）の知見によって支持されるだろう。吉中は，大学1年生を対象とした調査を踏まえ，不適を示すような適性検査の結果が得られた際には，対象者の約7割が結果を無視するような回答をしたと述べている。無視，すなわち注意を向けないと，当然その後の自己理解に関する学習は進まないだろう。もし吉中の知見にみられた比率が一般的なものであれば，適性検査を行ったとしても，その結果が自身の認識と異なる場合は自己理解に作用しがたいと推察される。また，もし自身の認識に沿った検査結果のみが注意を向けられるのであれば，これもまた自己理解の観点からは有効に作用しない可能性が生じよう。なお適性検査の結果と本人の希望や認識がどの程度一致するのか，もしくは一致しないのかに関する先行研究は多くないが，たとえば自己評価と検査結果との関連を検討した岡田・大島・田添（1996）では，その間の相関は強いものではないと述べられている。すなわち，検査の結果が自身の認識に沿う場合も異なる場合も十分にあり得ると考えられるのである。

もちろん，アセスメント結果の活用に関するこのような推測には反論もあろう。キャリア教育の文脈で実施されるものであれば，それに精通した指導者，担当者がおり，その結果を対象者に伝える際には十分な配慮がなされているはずである。そこで行われる配慮，サポートにより，受け取った結果を無視するといったことにはならないだろうといった推測もあり得る。しかし，現実には一斉指導の中での結果通知や，結果のみを渡すことも少なくないであろうし，担当者すべてがアセスメントに精通しているとも見なしがたい。また近年ではインターネット上で完結するようなテスト，検査もみられる。このような状況を踏まえると，アセスメント結果が自己理解に有用に作用するか否かは，結果の受け手に大きく依存しているとも考えられる。

自己理解の進展と，その道具としてのアセスメントの関係から考えると，受験者の認識に沿うか，異なるかを問わず，その結果には自己理解を促進する効果が望まれる。換言すれば，結果の受け手は，自身の認識に沿うか，異なるかを問わず，それを自己理解に活用することが望まれる。では，その結果を自己理解に活用するとはどのような様相を指すのであろうか。

Parsons（1909）のいう自己理解は，自分の諸特性（たとえば態度や能力，興味，希望，リソース，限界といったものやその根拠）についての明確な理解を指す。この指摘からすると，妥当性，信頼性を備えた検査を受け，その結果を取り入れたり，根拠が明確でない従前の自己認識と入れ替えたりするような操作が，アセスメントを踏まえた明確な自己理解の促進といえるだろう。しかしながら，それだけでは現在のキャリア教育の文脈における自己理解の促進とはいいがたい。特に理解の対象となる自己が変化し得るものであり，またその変化自体がキャリア教育の目的でもあることから，ある時点での検査結果をそのまま取り入れるとか，既存の認識と置きかえるだけでは自己理解の促進とはいいがたいのである。その結果が思考のきっかけや材料となって自己に対する認識に動きが生じ，自己に対する新しい認識構造が形成されることの方が重要視されるといえるだろう。Piagetの考え方を借りるならば，調節による新しい均衡状態へと向かうプロセスが生起することが期待される。本研究では「自己理解の進展」を，明確な自己定義に近づくという過程ではなく，よ

り状況に適合的・適応的な方向へ向かう，自己に対する新しい認識構造の形成，構築過程，Piaget のいう拡大均衡化の過程ととらえておく。

このようなとらえ方は，Piaget はもちろん，それに基づく Glasersfeld（1995）によるラディカル構成主義的観点との親和性が高い。すなわち，自己理解に関するアセスメントの影響を検討するためには，結果の受け手に注目すべきであり，本質的にはアセスメント結果を手にした者の内部で生じる心的活動，換言すれば自己に関する学習活動に注目しなければならない。しかし，その活動自体を把握することは不可能である。そこで本研究では，結果を得た際，どのような反応が生じるのか，どのような思考が生じるのかに着目し，パイロットスタディ的に，そのような場合の反応について，感情面と行動面から検討することを目的とする。

結果を得た場面としては，Piaget の均衡化の考え方がそうであるように，また「実質的な学習は，葛藤，混乱，驚きの時期に生じる」とレイマン（1998）が指摘するように，自分の認識とは異なった結果を得た場合，違和感を生じるような場合を設定する。自分の認識と異なるといっても様々なケースが想定されるが，今回はイメージのしやすさを考慮し，結果として自分の適性と合う職業のリストを得るような架空の検査を想定し，結果として「これまでに考えたこともなかった職業」と「自分に合わないと感じる職業」のリストを得た場面を仮定する。いずれも対象者の自己認識に沿っておらず，同化以外の反応が生じることが期待できる。もちろん現在の認識構造を維持するために，それを無視することもあり得るだろうが，その結果を取り入れるには調節が不可欠と考えられる。加えて，特に「自分に合わないと感じる職業」という結果の場合は，その判断を行った枠組みがすでに形成されている状況と考えられ，その枠組み自体を再検討することを迫られるため，「これまでに考えたこともなかった職業」という結果の場合よりも，それを取り入れることや，調節が困難になる場面と考えられる。本研究では，このような場合の反応について，感情面と行動面から把握する。

加えて本研究では，キャリア教育の専門家に対しても調査を行う。先に本研究でいう自己理解の進展について述べたが，それはたとえば Parsons（1909）のいう自己理解とは若干意味合いを異にしている。キャリア教育の専門家は，アセスメントの結果と自己理解の関係についてどのようにとらえているのか，またそれは本研究でいう自己理解の進展と異なっているのかについて検討するためである。さらに，学生の示す反応との異同についても検討を加える。

方　法

1．学生に対する調査

調査対象

2016 年に大学生を対象として調査を行った。授業時に配布，回収を行ったが，提出は任意であることを口頭で補足している。以下の分析では，学年，性別以外の変数に欠損をもたない 134 名（1 年生 6 名，2 年生 50 名，3 年生 58 名，4 年生 18 名，不明 2 名；男性 31 名，女性 100 名，不明 3 名）の回答を対象とする。

調査内容

自身の認識とは異なった検査の結果を得た場面として，「これまでに考えたこともなかった職業」と「自分に合わないと感じる職業」を設定した。それぞれの場合の教示文は，順に「あなたは信頼

できると評判の，職業適性検査を受けました。結果には，あなたの適性に最も合っていると判断されるいくつかの職業名がリストされていましたが，それはあなたがこれまでに考えたこともなかった職業ばかりでした」と，「あなたは信頼できると評判の，職業適性検査を受けました。結果には，あなたの適性に最も合っていると判断されるいくつかの職業名がリストされていましたが，それはあなたが『私には合わないだろうな』と感じる職業ばかりでした」である。場面の提示順を変えた2種類の質問紙を作成し，ランダムに配布した。

それぞれの場面では，以下の2つの内容について回答を求めた。なおいずれの尺度も，大学生を対象として，提示された場面で感じる感情や，その後の対応について自由記述を求めた予備調査での知見を踏まえて項目を作成した。

感情的反応:「違和感」「困惑」「ショック」「興味深さ」など13項目を用い，それぞれの結果を得た時，どの程度そのような感じをもつかを，「まったく感じないだろう」「少し感じるだろう」「かなり感じるだろう」「強く感じるだろう」の4段階で回答を求めた。なお「違和感」については，それまでの自身の認識と異なるという本調査の条件および場面設定の妥当性について確認する目的でも採用している。両場面で「違和感」はほとんどの対象者に生じ，また「自分に合わないと感じる職業」の場面ではそれが強く，「これまでに考えたこともなかった職業」の場面では，ある程度の強さで感じられると予測される。

行動的反応:「見なかった（聞かなかった）ことにする」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「適性判定の仕方について調べようとする」など16項目を用い，それぞれの結果を得た時，そのような反応をするかしないかを，「思ったり，したりはしないだろう」「たぶん思ったり，したりはしないだろう」「たぶん思ったり，したりするだろう」「思ったり，したりするだろう」の4段階で回答を求めた。

2. 研究者に対する調査

調査対象

2016年から17年にかけて，キャリア教育関連学会に所属する20名にメールで回答を依頼し，google社の提供するサービスを利用したweb調査を行った。18名からの回答を得られた。

調査内容

学生対象の調査と同様の2つの場面を提示し，それぞれにおいて，「このような場合，結果を受け取った対象者にどのような反応があると自己理解の進展につながりやすいとお考えでしょうか。以下の中から，つながりやすいと判断される反応を選んでチェックしてください（いくつ選んでいただいてもかまいません）」という教示を行った。回答の選択肢は，学生対象の調査で行動的反応の把握に用いた，「見なかった（聞かなかった）ことにする」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「適性判定の仕方について調べようとする」など16項目である。

なお分析にはR（3.3.2）およびpsych等の各種パッケージを用いた。

結　果

学生に対する調査の，感情的反応から検討を進める。「これまでに考えたこともなかった職業」の場面（以下，無考慮場面），「自分に合わないと感じる職業」の場面（否定場面）それぞれに，度数および平均値，標準偏差（「まったく感じないだろう」を1，「強く感じるだろう」を4とする4

段階で得点化したもの）を求めた。平均値によって並び替えたものを Table 1 に示す。

まず「違和感」については，それを「まったく感じないだろう」とした者は，無考慮場面で 15 名（11.2%），否定場面で 5 名（3.7%）であった。またその平均値は，無考慮場面で 2.55，否定場面で 3.10 であり，否定場面においては最も平均値の高い項目であった。このように「違和感」は両場面でほとんどの対象者に生じ，また否定場面では強く，無考慮場面ではある程度の強さで感じられるという事前の推測と合致した結果が得られたことから，状況および場面設定は意図に沿ったものといえるだろう。

次に，「違和感」を含む 13 項目の様相について検討する。無考慮場面では，「興味深さ」「好奇心」「おもしろさ」などの平均値が高く，「イライラ」「失望」「不快感」などで低い。否定場面では「違和感」「困惑」「混乱」などが高く，「イライラ」「失望」「ワクワク」などで低い。「イライラ」「失望」

Table 1　各場面における感情的反応

	まったく感じないだろう	少し感じるだろう	かなり感じるだろう	強く感じるだろう	平均値	標準偏差
無考慮場面						
イライラ	99	28	5	2	1.33	0.62
失望	90	34	9	1	1.41	0.65
不快感	85	35	11	3	1.49	0.74
不満	60	56	13	5	1.72	0.79
ショック	61	53	11	9	1.76	0.87
不安	29	57	38	10	2.22	0.87
混乱	21	61	39	13	2.33	0.86
ワクワク	22	54	42	16	2.39	0.90
違和感	15	54	41	24	2.55	0.91
困惑	10	55	48	21	2.60	0.84
おもしろさ	8	47	56	23	2.70	0.82
好奇心	5	53	51	25	2.72	0.81
興味深さ	4	42	57	31	2.86	0.81
否定場面						
イライラ	64	44	23	3	1.74	0.82
失望	64	39	24	7	1.81	0.91
ワクワク	47	67	12	8	1.86	0.81
不快感	49	47	27	11	2.00	0.95
おもしろさ	30	70	28	6	2.07	0.78
ショック	35	54	29	16	2.19	0.96
不満	34	46	43	11	2.23	0.93
好奇心	25	62	35	12	2.25	0.86
興味深さ	20	64	38	12	2.31	0.84
不安	23	42	44	25	2.53	0.99
混乱	14	43	50	27	2.67	0.92
困惑	3	47	37	47	2.96	0.89
違和感	5	26	54	49	3.10	0.84

などの感情は両場面で低い（ただし，その程度は否定場面の方が高めである）が，強く感じられる感情には違いがあると考えられる。

さらに「違和感」を除く 12 項目に対して因子分析を行った。まず 2 つの場面に共通する構造があると仮定し，2 場面の回答を込みにして分析を行った。抽出する因子数については，1 以上の固有値は 3 であり，平行分析は 2 因子を示唆したことなどを踏まえ，2 因子および 3 因子を候補とした。ミンレス法およびオブリミン回転を用いた因子分析を行った結果，「ショック」を除く 11 項目で 3 因子を抽出することが，最も単純構造に近く解釈もしやすいと判断した。その結果を Table 2 に示す。

第 1 因子は，「好奇心」「ワクワク」「おもしろさ」「興味深さ」の 4 項目が高いパターンを示しており，第 2 因子には「不快感」「イライラ」「不満」「失望」が，第 3 因子には「困惑」「混乱」「不安」の 3 項目が高いパターンを示していた。そこで順に，「肯定的注目」，「否定的注目」，「当惑」と命名する。次に，以上の因子分析モデルを各場面での回答に適用した確認的因子分析を行った。適合度指標については，$\chi^2(82) = 125.55, p < .01$, GFI = .990, AGFI = .981, CFI = .971, RMSEA = .062 であり，適合はかなりよいといえるだろう。観測変数と各因子の対応関係および因子間の関連は Table 3 に示す通りであり，観測変数と各因子の対応は十分といえる。因子間の関連は，第 1 因子と第 2 因子，第 2 因子と第 3 因子の関連が両場面で比較的強いといえる。これらにくらべ第 1 因子と第 3 因子の間は弱いものであり，また場面間で相違があるといえるだろう。

両場面において各因子に対応する項目の内部一貫性は高いことが確認できたため（Table 4），それぞれの得点（項目平均）を算出した。その平均値から，否定場面では当惑の得点が高く，肯定的注目と否定的注目は同程度であった。無考慮場面では肯定的注目や当惑の得点が相対的に高く，否定的注目が非常に低い。対して否定場面では，3 つの感情の差が小さく，いずれもがある程度生起

Table 2　感情的反応の因子分析結果

	F1	F2	F3
好奇心	.862	.016	.021
ワクワク	.843	− .014	.044
おもしろさ	.779	− .001	− .096
興味深さ	.763	− .050	− .001
不快感	− .061	.894	− .068
イライラ	.039	.844	− .031
不満	− .074	.676	.160
失望	.034	.676	.134
困惑	− .095	− .076	.783
混乱	.028	.047	.771
不安	.071	.142	.652
因子間相関			
F1		− 0.501	− 0.266
F2			0.541

Table 3　確認的因子分析結果

		標準化された推定値	
		無考慮場面	否定場面
F1	好奇心	.785**	.890**
肯定的注目	ワクワク	.866**	.779**
	おもしろさ	.768**	.785**
	興味深さ	.764**	.758**
F2	不快感	.863**	.847**
否定的注目	イライラ	.702**	.819**
	不満	.806**	.811**
	失望	.745**	.720**
F3	困惑	.703**	.743**
当惑	混乱	.638**	.884**
	不安	.790**	.702**
F1−F2		−.456**	−.487**
F1−F3		−.130	−.287**
F2−F3		.529**	.591**

**$p < .01$

Table 4　感情的反応下位尺度の信頼性と場面毎の得点の様相

		場面		無考慮場面		否定場面	
		無考慮	否定	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
F1	α 係数	.87	.87	2.67	0.71	2.12	0.70
肯定的注目	ω 係数（ω_t）	.90	.90				
F2	α 係数	.85	.88	1.49	0.59	1.94	0.78
否定的注目	ω 係数（ω_t）	.94	.91				
F3	α 係数	.76	.82	2.38	0.70	2.72	0.80
当惑	ω 係数（ω_t）	.86	.88				

するといえるだろう。否定場面ではいずれの感情も生じるが，無考慮場面では特に否定的注目が生起しにくいという差異がうかがえる。なお，対応のある t 検定を行ったところ，すべての因子で場面間の有意な差が認められた（t 値は順に 8.79，7.08，5.42，自由度はいずれも 133）。

次に，行動的反応項目について検討する。場面ごとに，行動的反応項目の度数および平均値，標準偏差（「思ったり，したりはしないだろう」を 1，「思ったり，したりするだろう」を 4 とする 4 段階で得点化したもの）を求めた。平均値によって並び替えたものを Table 5 に示す。

無考慮場面においては，「参考情報としてとりあえず頭に残しておく」や「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」において，平均値が 3 を越えており，また「する」という回答（「たぶん思ったり，したりするだろう」と「思ったり，したりするだろう」）が多数（90％程度）を占め

ている。他方で,「これまで自分が間違っていたのだろうと思う」や「それ（その事実）を受け入れない」「見なかった（聞かなかった）ことにする」は平均値が 2 以下であった。否定場面では,「参考情報としてとりあえず頭に残しておく」で平均値が 3 を越え,「これまで自分が間違っていたのだろうと思う」が 2 以下であった。その他の項目は 2 点台に集中している。平均値のばらつきという点では無考慮場面の方が顕著であり，否定場面の方が多様な行動的反応が同程度のレベルで混在する傾向があると推察できよう。

内容的な特徴としては, 無考慮場面では「参考情報としてとりあえず頭に残しておく」「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「それまでの自分の認識を考え直してみようとする」などの得点が高いことから，参考情報として頭に残し，その結果を受け入れるところから認識を考え直したり，新たな可能性を考えたりする行動が生じやすいといえるだろう。他方，否定場面では「参考情報としてとりあえず頭に残しておく」「それに対する判断を保留する」「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」「自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える」「あらためて自分の判断を大切にしようと思う」などの平均値が高い。これは，参考情報として頭に残し，新たな可能性を考える方向性と同時に，結果に対する判断を保留し，従前の自己認識に固執するような方向性も生じやすいことを示していると考えられよう。

以上の結果から，場面によって生じる行動的反応には若干の差があるように推察される。そこでその差異について平均値の差からさらに検討を加える。なお, 行動項目に対しても因子分析を行い，両場面を込みにした場合，それぞれの場合等で多様な方法を試したが，明確な因子を抽出することは困難であった。そこで以下の分析では，項目ごとに検討を進める。

場面ごとの平均値について対応のある t 検定を行い，あわせて差の大きさについての情報を得るため Hedges の g を算出した（Table 6）。「適性判定の仕方について調べようとする」「あらためて自分の判断を大切にしようと思う」「これまで自分が間違っていたのだろうと思う」の 3 項目以外で 5% 水準で有意な差が認められた。無考慮場面の方が有意に高い項目は,「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「それまでの自分の認識を考え直してみようとする」「現実（事実）として納得する」などであった。他方，否定的場面の方が有意に高い項目は,「見なかった（聞かなかった）ことにする」「気にしないことにする」「それ（その事実）を受け入れない」「ひとつの事例に過ぎないとして軽視する」などであった。おおむね，結果を無視するような行動反応が否定場面で高く，結果を受け入れたり，結果から自分について考えたりするような反応が無考慮場面の方が高いといえるだろう。

さらに感情的反応と行動的反応の関連について検討する。Table 6 に，得られた相関係数を示す。また場面間の相関係数も合わせて算出した。

まず無考慮場面での関連について検討する。絶対値で .300 を目安として検討すると，肯定的注目と正の関連の強い行動項目は,「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」「参考情報としてとりあえず頭に残しておく」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」などであった。また負の関連では「それ（その事実）を受け入れない」「見なかった（聞かなかった）ことにする」などである。傾向として，結果を無視せず取り入れ，自らの知識へ付加したり，また新しい知識構築へ進むことと関連が強いといえるだろう。否定的注目と正の関連の強い行動項目は,「見なかった（聞かなかった）ことにする」「それ（その事実）を受け入れない」「気にしないことにする」などであり，負の関連では「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」などである。結果を無視するか, 受け入れるかといった判断との関連が認められる。

Table 5　各場面における行動的反応

	思ったり、したりはしないだろう	たぶん思ったり、したりはしないだろう	たぶん思ったり、したりするだろう	思ったり、したりするだろう	平均値	標準偏差	専門家の指摘
無考慮場面							
これまで自分が間違っていたのだろうと思う	67	53	13	1	1.61	0.69	
それ（その事実）を受け入れない	61	59	12	2	1.66	0.70	●
見なかった（聞かなかった）ことにする	49	58	24	3	1.86	0.79	●
気にしないことにする	26	72	32	4	2.10	0.74	●
適性判定の仕方について調べようとする	45	36	38	15	2.17	1.02	●
自分の考えを変えようと思う	23	63	45	3	2.21	0.75	
ひとつの事例に過ぎないとして軽視する	29	59	34	12	2.22	0.89	●
自分の理解が不足していたと思う	32	35	53	14	2.37	0.96	●
自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える	19	39	55	21	2.58	0.92	
現実（事実）として納得する	10	41	72	11	2.63	0.74	○
あらためて自分の判断を大切にしようと思う	9	38	71	16	2.70	0.77	●
それに対する判断を保留する	18	23	65	28	2.77	0.93	
そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる	6	24	87	17	2.86	0.68	●
それまでの自分の認識を考え直してみようとする	7	25	82	20	2.86	0.73	●
自分（自分の考え）の新たな可能性を考える	5	6	75	48	3.24	0.71	
参考情報としてとりあえず頭に残しておく	1	8	68	57	3.35	0.63	○
否定場面							
これまで自分が間違っていたのだろうと思う	75	46	13	0	1.54	0.67	
自分の考えを変えようと思う	39	65	28	2	1.95	0.75	●
それ（その事実）を受け入れない	36	61	32	5	2.04	0.81	●
自分の理解が不足していたと思う	37	44	47	6	2.16	0.89	●
適性判定の仕方について調べようとする	48	28	37	21	2.23	1.10	●
見なかった（聞かなかった）ことにする	26	51	41	16	2.35	0.93	
現実（事実）として納得する	19	53	58	4	2.35	0.76	●
気にしないことにする	13	57	44	20	2.53	0.86	●
そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる	13	46	63	12	2.55	0.79	●
それまでの自分の認識を考え直してみようとする	16	42	59	17	2.57	0.86	●
ひとつの事例に過ぎないとして軽視する	20	38	55	21	2.57	0.93	○
あらためて自分の判断を大切にしようと思う	10	32	73	19	2.75	0.79	●
自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える	14	31	59	30	2.78	0.91	
自分（自分の考え）の新たな可能性を考える	8	26	83	17	2.81	0.73	○
それに対する判断を保留する	13	19	67	35	2.93	0.89	○
参考情報としてとりあえず頭に残しておく	5	9	84	36	3.13	0.69	●

専門家の指摘欄の●は有意に選択されなかった項目，○は選択された項目を示す

		無考慮場面		検定結果	否定場面		Hedges'g	平均の差	感情因子との相関						場面間の相関係数
									無考慮場面			否定場面			
		平均	SD		平均	SD			肯定	否定	当惑	肯定	否定	当惑	
6	自分（自分の考え）の新たな可能性を考える	3.24	0.71	>>	2.81	0.73	− 0.52	− 0.43	.622	− .326	.038	.523	− .328	− .028	.432
2	そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる	2.86	0.68	>>	2.55	0.79	− 0.37	− 0.31	.441	− .348	− .094	.395	− .410	− .096	.430
4	それまでの自分の認識を考え直してみようとする	2.86	0.73	>>	2.57	0.86	− 0.34	− 0.29	.314	− .184	.050	.460	− .211	− .002	.549
9	現実（事実）として納得する	2.63	0.74	>>	2.35	0.76	− 0.34	− 0.28	.376	− .252	− .032	.259	− .213	.040	.468
13	自分の考えを変えようと思う	2.21	0.75	>>	1.95	0.75	− 0.32	− 0.26	.238	− .141	− .050	.176	− .167	.077	.467
7	参考情報としてとりあえず頭に残しておく	3.35	0.63	>>	3.13	0.69	− 0.29	− 0.22	.472	− .291	.034	.172	− .164	.103	.424
5	自分の理解が不足していたと思う	2.37	0.96	>	2.16	0.89	− 0.22	− 0.21	.317	− .022	.195	.321	− .043	.112	.566
1	見なかった（聞かなかった）ことにする	1.86	0.79	<<	2.35	0.93	0.52	0.49	− .557	.489	.373	− .345	.532	.358	.490
8	気にしないことにする	2.10	0.74	<<	2.53	0.86	0.45	0.43	− .364	.388	.274	− .272	.376	.104	.382
11	それ（その事実）を受け入れない	1.66	0.70	<<	2.04	0.81	0.44	0.38	− .482	.424	.196	− .358	.464	.232	.434
16	ひとつの事例に過ぎないとして軽視する	2.22	0.89	<<	2.57	0.93	0.40	0.35	− .187	.176	.181	− .184	.355	.034	.590
15	自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える	2.58	0.92	<<	2.78	0.91	0.25	0.20	.138	.137	.233	.338	.092	.189	.713
10	それに対する判断を保留する	2.77	0.93	<	2.93	0.89	0.18	0.16	− .060	.080	.119	− .070	.158	.322	.590
3	適性判定の仕方について調べようとする	2.17	1.02	ns	2.23	1.10	0.08	0.06	.393	.058	− .032	.196	.087	.125	.833
12	あらためて自分の判断を大切にしようと思う	2.70	0.77	ns	2.75	0.79	0.07	0.05	.073	.241	− .019	.112	.142	.080	.605
14	これまで自分が間違っていたのだろうと思う	1.61	0.69	ns	1.54	0.67	− 0.11	− 0.07	− .171	.182	.288	.060	.092	.188	.585

Hedges'g によって並び替えている
感情因子との相関係数にはポリシリアル相関係数，場面間の相関はポリコリック相関係数を利用した
.300 以上の部分に網掛けをした

当惑については，先の 2 つの因子に比較して関連の強い行動項目が少ない。目安とした値を越える結果が見られたのは,「見なかった（聞かなかった）ことにする」と正の相関が認められたのみであった。

否定場面での情緒的反応と行動反応の関連について先と同様の基準を目安として検討すると，肯定的注目と正の関連の強い行動項目は，「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」「それまでの自分の認識を考え直してみようとする」「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」などであった。また，負の関連では「それ（その事実）を受け入れない」「見なかった（聞かなかった）ことにする」などであった。否定的注目と正の関連の強い行動項目は，「見なかった（聞かなかった）ことにする」「それ（その事実）を受け入れない」「気にしないことにする」「ひとつの事例に過ぎないとして軽視する」などであり，負の関連では「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」などであった。無考慮場面と同様，結果を無視するか，受け入れるかといった判断と関連すると考えられ，さらにその関連性はより強いといえるだろう。当惑については目安とした値を越える結果が見られたのは,「見なかった（聞かなかった）ことにする」「それに対する判断を保留する」と正の相関が認められたのみであった。

以上の結果から，いずれの場面においても，肯定的注目感情は結果を受け入れ考えることと関連が強く，否定的注目感情は結果を拒絶することとの関連が強いといえるだろう。ただしこれは全体的にみた場合の傾向であり，場面間で強さに違いがある項目も含まれている。また当惑の感情は，いずれの場面でも行動的な反応との関連が弱かった。

さらに場面間の相関係数も算出したが，得られた相関係数はかなり高めであり，両場面に一貫した反応をとりやすいことが示唆される。しかしその値は,「適性判定の仕方について調べようとする」の .833 から,「気にしないことにする」の .382 までかなり大きな差も認められる。「適性判定の仕方について調べようとする」「自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える」は，飛び抜けて場面間の相関が高いが，背後に何らかの個人特性があると考えることもできるだろう。

最後に，キャリア教育の専門家に対する調査の結果について検討する。結果の概要は Table 7 に示す通りである。なお無考慮場面における調査協力者の選択個数は，最小 1 個，最大 8 個，平均 4.78 個，否定場面では，最小 1 個，最大 8 個，平均 5.00 個であった。N が 18 の場合，二項検定により 5%水準で有意な偏りが認められる比率が 4: 14 であることを目安にすると，多くの項目で偏りがあるといえるだろう。また，両場面で類似した判断がなされているともいえよう。

両場面でひとりとして選択しなかった「見なかった（聞かなかった）ことにする」「それ（その事実）を受け入れない」をはじめ，結果を無視，軽視するような反応は，すべて有意に選択されない項目に含まれている。また,「これまで自分が間違っていたのだろうと思う」も，両場面で選択がなかった。加えて「自分の考えを変えようと思う」や,「そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる」,「現実（事実）として納得する」といった自分自身に対する知識を置きかえるような反応も有意に選択されない項目といえる。

他方，両場面で有意に選択された項目は,「自分（自分の考え）の新たな可能性を考える」と「自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える」の 2 つであった。「それまでの自分の認識を考え直してみようとする」は，否定場面のみで有意に選択される項目である。共通点としては，その結果から「考える」という自発的行動が含まれる点にあるといえるだろう。

Table 7　専門家の指摘する自己理解が進展しやすい反応

	否定場面	無考慮場面
見なかった（聞かなかった）ことにする	0**	0**
そうなのだろうと事実（結果）を受け入れる	1**	2**
適性判定の仕方について調べようとする	12	11
それまでの自分の認識を考え直してみようとする	14*	11
自分の理解が不足していたと思う	4*	5
自分（自分の考え）の新たな可能性を考える	15**	14*
参考情報としてとりあえず頭に残しておく	11	12
気にしないことにする	3**	0**
現実（事実）として納得する	3**	2**
それに対する判断を保留する	3**	2**
それ（その事実）を受け入れない	0**	0**
あらためて自分の判断を大切にしようと思う	7	8
自分の考えを変えようと思う	2**	1**
これまで自分が間違っていたのだろうと思う	0**	0**
自分の考えとなぜ齟齬（そご）が生じたのかを考える	14*	15**
ひとつの事例に過ぎないとして軽視する	1	3

アスタリスクは二項検定の結果を示す

考　察

本研究は，適性検査の結果が対象者の認識に沿わない場合にどのような反応が生じるのか，どのような思考が生じるのかについてパイロットスタディ的に検討することを目的とした。そして認識に沿わない場合，すなわち「本人の認識と異なった」結果を得た場面として，「これまでに考えたこともなかった職業」（無考慮場面）と「自分に合わないと感じる職業」（否定場面）の場合を設定し，感情面と行動面から反応を測定して分析を行った。また，キャリア教育の専門家を対象に，自己理解の進展に寄与すると考えられる，アセスメント結果に対する反応についての調査も行った。

その結果，2つの場面で生じやすい感情的反応，行動的反応は異なるであろうことが示唆された。感情的反応では，無考慮場面では肯定的注目や当惑の感情が生起しやすく，否定的注目感情はほとんど生起しないと考えられる。他方，否定場面では肯定的注目，否定的注目，当惑のすべての感情が生起する可能性が示唆された。ただし，各感情をいだく程度は全体的にそれほど高くはないようであった。

行動的反応に関しても，場面間で若干の差異が認められた。平均値のばらつきという点では無考慮場面の方が大きく，否定場面の方が多様な行動的反応が同程度のレベルで混在する傾向があった。内容面では，無考慮場面では，結果を受け入れ，情報として頭に残し，そこから自分に対する認識を考え直したり，新たな可能性を考えたりする行動が生じやすいようであった。他方で否定場面では，参考情報として頭に残し，新たな可能性を考える傾向もあるが，結果に対する判断を保留し，従前の自己認識に固執するような行動も生じやすいことが示唆された。

また感情的反応と行動的反応の関連を検討したところ，両場面で比較的類似した関連性が認めら

れ，肯定的注目感情は結果を受け入れ考えることと関連が強く，否定的注目感情は結果を拒絶することとの関連が強かった。これは認知的不協和の考え方などからすると，当然の結果ともいえるだろう。

本研究では，自己理解の進展に関するキャリア教育の専門家の見解についても調査を行った。Table 7 に示された，キャリア教育の専門家が考える自己理解の進展につながりやすい反応は，両場面においてその結果からさらに「考える」ことを重視していた。また，結果を無視するような反応，従前の自身の理解を間違いとするような反応，自分に対する知識を得られた結果と置きかえるような反応は，いずれの場面においても自己理解の進展に有用と判断されていなかった。本研究では自己理解の進展を，より状況に適合的・適応的な方向へ向かう，自己に対する新しい認識構造の形成過程ととらえたが，それは専門家に共有されているものと類似性が高いといえるだろう。

専門家の判断と学生の反応の関連については，いずれの場面においても，学生がしない傾向にあるものと，専門家が自己理解の進展に有用とは判断しないものはかなり一致しているといえるだろう（専門家の判断の結果を加えた Table 5 参照）。しかし，専門家が有用と判断していることを学生がしているかという点では，齟齬がみられるといえるだろう。また専門家が有用とは判断しないものの，学生はしがちな行動反応もみられる。

本研究でいう自己理解の進展は，専門家の考えるところとの類似性が高いことが示されたので，この観点からアセスメント結果に対する学生の反応過程を検討してみたい。本研究でいう自己理解の進展は対象者の内部で生じるものであり，その内的活動自体を把握することは不可能であるが，結果からの推測を交えた解釈を試みる。

まず「これまでに考えたこともなかった職業」のリストを手にした場合，新規性という点で従前の自己認識と不整合な情報が提示されたことによる戸惑いが生じるが，それ以上に，新規性ゆえの興味が生まれる。そして，その情報を受け入れ，記憶し，自らの新たな可能性を考える反応につながりやすい。このようなプロセスがあると仮定すると，そこに生じている自己理解の進展は，自己に対する根本的な再検討というよりは，結果に示された選択肢が従前からの自己に対する認識に付加できるかどうかという点での検討と考えられよう。すなわち，調節というよりは，同化の可否が検討されているのではないだろうか。なお，比率としては少ないが，このような場面においても不快感や不満を強めに感じる対象者が存在する。そのような場合は，結果の無視につながりやすいが，これも同化のみを用いた対処であり，調節は機能していないといえるだろう。もちろんこれは，本研究でいう自己理解の進展にはつながらないプロセスと考えられる。

他方，「自分に合わないと感じる職業」のリストを手にした場合は，自分には合わないという認識の枠組みが事前に存在するため，困惑，混乱といった当惑の感情が生起しがちである。またこの場面では，当惑の感情と不快感やイライラといった否定的な注目感情の関連が強く，これらが同時に生起しがちといえよう。否定的な感情が生じるほど，その結果を無視するような反応傾向が生じる。先と同様，これは同化のみを用いた対処と考えられ，調節の動きはみられないといえるだろう。

しかし感情的反応の平均値をみると，興味深さや好奇心といった肯定的な注目感情も否定的な注目感情と同程度感じられている。このような感情は，その齟齬に対する再検討や自身の理解不足の認識，従前の自己認識の再検討といった反応と関連しており，加えて自分の新たな可能性を考えることとも関連している。ここには，検査結果という新しい情報とより適合的な方向へと向かう，自己に対する新しい認識構造の形成プロセス，すなわち均衡に向かう調節のプロセスの存在を指摘できるだろう。

以上のように，本研究では自己理解に関するアセスメントの結果に対する対象者の反応について，その概略を検討してきた。全体的な傾向として，学生はアセスメント結果に対して自己理解の進展に不適切な対応をしているとはいえないが，有用な反応をしているともいいがたい。本研究でいう自己理解の進展につながりやすいのは，「自分に合わないと感じる職業」のリストを手にし，それに対して興味や好奇心を感じた場合に限定されるともいえるだろう。それ以外は，同化，あるいは結果の無視など，自己理解の進展にはつながらない対処によって，新しい情報（検査結果）との均衡化をはかるようである。アセスメントを自己理解の進展に活用しようとする際には，対象者にこういった傾向があることに留意しておく必要があるだろう。

このようなアセスメント結果と自己認識にズレがある場合，各種認知バイアスが働くことが考えられる。しかし同時に，たとえばレイマン（1998）が指摘するように，それは学習のきっかけにもなる。本結果からも，そこから自己理解の進展，換言すれば自己に関する学習が始まる場合も，逆にまったく自己理解に影響のない認知的処理がなされる場合もあることが推察された。始めに述べたように，アセスメントは自己理解の道具として重要な位置を与えられている。その有用性を十全に発揮させるためにも，今後さらに詳細な検討が期待される。

引用文献

Glasersfeld, E. von (1995). *Radical constructivism: A way of knowing and learning*. London: The Falmer Press.（橋本 渉，訳　2012　ラディカル構成主義　NTT 出版）

室山晴美（2008）．アセスメントツールの活用　日本キャリア教育学会（編）　キャリア教育概説　東洋館出版社　156–164.

岡田 定・大島 禎・田添 司（1996）．就職指導支援システムをめぐる諸問題：摂南大学の事例に基づく考察　経営情報研究：摂南大学経営情報学部論集　*3(2)*，1–14.

Parsons, F. (1909). *Choosing a vocation*. Boston, MA: Houghton Mifflin.

レイマン アラン・J.（米谷淳　訳）（1998）．認知構造枠組内部のふりかえりの促進：理論，研究，実践　神戸大学大学教育研究センター大学教育研究，*6*，27–40.

坂柳恒夫（2007）．キャリア・カウンセリングの概念と理論　愛知教育大学研究報告教育科学編，*56*，77–85.

Seligman, L. (1994). *Developmental Career Counseling and Assessment* (2nd Edition). Thousand Oaks, CA: Sage.

吉中 淳（2011）．大学生の職業適性についての暗黙理論と職業適性検査への信頼感に関する研究　弘前大学教育学部紀要，*106*，63–68.